

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	感情教育待望論（その五）：心意伝承としての国語
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 11 : 2 - 6
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045120
Right	
Relation	



心意伝承としての国語

上原輝男

一、

民俗学の研究対象の内に、心意伝承部門がある。民俗としての心性を取り扱うのであるから、簡単な学問ではない。対象の定め方もむづかしいし、研究方法も容易ではない。しかし、民俗学の成果として、最も期待され歓迎されるものといえば、かならずしも古老の昔語りでもなければ、埋もれた秘境の紹介でもなくて、現代のわれわれに生きづいている民俗として心性が照射されることにある。それは民俗学専門者だけの関心ではなくて、この世を生きる者にとって、ふと立止まらされる己が心の問題でもあるはずなのである。

特にと言っておこう。人の子が親となり、親が子に何気なく教えている躰けのことや、また特に小学校の教師が、当然のことのように注意している心の折り目のことなどはそれらは決して我流の発明によらず、殊更にいえば、自分の親から、あるいは世間から、伝えられ教えられて来たことを、次の世代に承けつがせている大変な教育力だということができる。しかし、それも殊更に言えばの話で、こういうことは殆んど無意識に行われているから、習慣視することはあっても、さほど重要なこととは思っていない。

しかし、教育が成立するためには、たとえばどんな特殊教育であっても、被教育者の日常性に還元されなければならない。これが教育の絶対なのである。ところが、教育は教育者と被教育者との関係に於て行われるところからであろう、ある種の能力の伝授もしくは付与だと思わせられるところから、教育は日常性からの乖離あるいは日常性からの脱却だと錯覚する。教育を受ければ、この日常が変革できるとする野心はそれなりに意味があることではあるが、教育を功利的に考えてしまう独断に走りやすい。

毎日のように書き立てられる新聞紙上の学校関係の不祥事件に、人々は今日の教育の無力無能を慨嘆する。確かにもつとよりよく教育が行われたならば、事件は起らなくて済んだかもしれないけれども、こうした場合の教育とは、多くは抑止力としてであり、公共的立場に立った防衛力みたようなことである。一般的にいつて、教育が何かに対する対策めいて受けとられていることは確かであるが、教育が彌縫策であつてよいわけがない。たとえ、それが適切な対応策であつても、その目的性、その必要性は個々人において異同があるからその奏効性は同一ではなく、かならず変動がある。教育は投薬ではない。いま最も望まれているのは心の教育ではなかったか。それも病める心に投薬する話としてではなく、それは生まれ出た人の子が人の心を獲得していく過程を保証することなのである。

教育の根本あるいは重大事は、たとえてい

うなら、三つ児の魂百までという、その魂を
得させるところであるにもかかわらず、いま
世の中で騒いでいるのは、それ以後、それ以
外の、つまり現実社会適応から教育を把える。
この子に何をやらせようかというのも然り、
塾通い、進学競争から、才能教育から、はた
また非行少年少女という流行語も然りだとい
える。教育を授産と同義語にしてしまいか、
あるいは歯止めとしての矯正の類義語にして
しまつて、教育の本来性に立ち帰れない。
知的付与としての教育以前、あるいは知的
教育以外の、つまり三つ児の魂に似たところ
に本来の教育が期待されなければならない。
人間にとって、互いに愛され、信じ合おうと
する拠り所にこそ教育は集中されるべきであ
る。もちろん、人間同士のその拠り所は、そ
のためにこそ、互いに裏切られ泣かされるも
うどうしようもないものもある。日本人に
とつて、魂というよび名は、明らかに知的な
ものではなくて、(魂)性の音も示す通り、執拗
なまでに変更をきらう情的対象である。和魂
漢才、和魂洋才と、日本人が、事ある場合に
忘れずに称えたこの合言葉は、かならずしも
国粹主義鼓吹のためばかりとは思えないもの
である。少くとも当時の教育対象として魂と
才とを区別して把えていたことに認めねばな
らないし、和魂を強調するところがあるとす
れば、付加されたもの(客体)と、それ以前

の付加されたものを働きに変えるもの(主体)
との関係をいつたものかもしれない。

三つ子の魂といい、和魂というそれを私な
りに現代的に“情動”(emotion, psycho-
motor)とおきかえてみると最もわかり易
いように思える。但しこの“情動”というの
は、極めて、気まぐれで、それでいて頑なで
ある。それはその発動性におけることだけで
なく、個人差においても、神はこのことにお
いて平等ではない。と、神のせいにしたくな
るほどに先天的なものに思わせられて自由に
ならないが、かならず自分らしきともにあ
るのがこれである。世の中の人はこれを性質
といい、性分などといったりする。もちろん、
世の中の人は、性質分析しているわけではな
いから、その多くは、その人の言動の日常性
を見てとつたときにこの語を用いているだけ
である。

言動の日常性とは感覚的には極めてわかり
易いが説明のしにくいものである。人間の言
動という働きが抑々感覚的なことから、敢え
て、その言動の日常性を把えた感覚をもとに
話を継ぎたい。一体、その日常性とは何か。
やはり、その行為者のある種の普遍化した心
の発動性、もしくはその形式ではなかっただ
ろうか。

古風で、封建的余風とばかり思われる形式
至上主義的な躰教育も、実は教育の日常性に

還元されなければならないことを知つた上で
のことだとするなら、やはり、もう一度、わ
れわれ自身の立居振舞いや居ずまいを整え直
す必要があるであらう。現代の日本人は、
相当な教育を承けながら、決して江戸や明治
の人たちより生きざまが美しいとはいえない
のはどうしたことであらう。いまは躰教育の
不徹底さをいおうとするのではない。その前
に、人間が生きていることにおいて、日常性への
思顧の足りなさ、日常観の消耗が、心の行方
を見失わせ始めたのである。

二、

現代も心を育てることを放棄しているわけ
ではない。道徳教育・情操教育等々。しか
し現代のそれらの教育は、ここで述べようと
する承けつぎ、伝え残そうとする民俗として
の心性の教育とは、明らかに異質である。本
来異質であつてはならないのだけれども、道
徳教育は抑止力、もしくは制御心としての涵
養を目的として行ふことが常識化しているし、
情操教育は芸術的分野の教育の効力をいうと
きのモットーにおさまっている。

元来、日本語としての“みさほ”とは、状
況に左右されない不変の色合いをいつた。昔
の女学校の校訓や校歌にこれを謳い上げない
ことはないほどに、婦徳とともにあつたこと
ばであつた。常磐の松の色にこれを託すのも、

その世俗に汚れぬ心意を見たからにちがいない。そして当時の人々はこういうことを情操教育と呼んでいたのである。つまり魂の抛り所を指示し、心を洗うことをさせたのである。教育の基本姿勢は修身修養であったことを正視し直すべきだと思う。それが儒学の影響を受けていようと、戦時下の忌わしい思い出と重複しようと、人が人たるべきことに集中しようとする歴史的所産もしくはその姿勢の中に教育の本来性を見出すべきであった。

戦前のそれは確かに世俗に背を向け、孤高とも思える精神主義を教育主眼としていた。教職者が聖職者であったのも決して誇張ではない意味もそこにある。しかし、いまもう一度それを言いたいのではない。戦後教育は世俗の中で行うとする一大転換を決意した筈であったのである。戦前の教育が清く美しく、戦後のそれがうす汚れ、自堕落に見えるのも当然である。しかし、戦前戦後を通じて、人が人としての価値を高めようとする営みを教育というのなら、時代を超えた大道が貫かれてくる筈である。即ち、戦前は世俗を避けたところにこの道は狭隘さと頑固さがあつたし、戦後の道は世俗の中に突入して雑踏と混乱に方向を見失いがちであつたけれども、旅人は道を行かねばならぬことに変わりはなかつたのである。

現代女性に、戦前の「みさほ」と言い立て

ても、反感を買うがよいところで、老人の懐旧談として聞き流されるぐらいが関の山であろう。但し、この「みさほ」にしても、どうして戦前女性が縛りつけられなければならぬ心性たり得たかについては、その後の世を生きる者にとつて重大関心事であつてよい。世俗の中で生きたる特権は、押しつけられない精神の平明さにある。しかし、世の中を凡俗に従つて平明に生きることは、目的や覚悟あるいは躰や形式をもつて殊更に生きたる姿勢を堅持する生き方よりも、却つて高度で困難なことは、人間であるなら三十も半ばを過ぎる頃から自覚されることであらう。だからやがてわかるべきが来るのだけれども、「やがてわかる」ときが来る」という結果をまつての実証では教育とはならない。ここにも世俗の中で行われる教育のむずかしさがある。鉄は熱いうちに打たねばならぬというが、凡俗には出来ることではないといふこの情と実との両面の桎梏の中で成立するのが教育なのである。人間の情動を拒絶し、あるいは理性は高く情欲は卑しとする。排他・選別して孤塁を守る式のものがある。これが昔の教育であつた。所謂、閉鎖型教育である。これに反して、開放教育は人間性なるオールマイティによつて、情動は解放され、あるいはこれを許容、包容してとり込み、無差別平等を原則とするみたいが大衆化を目的とするようなところがある。人間の教

育目的が時代によつて変るなどという方がおかしいのであるが、日本人の性急さは歴史を見通し、人間が何者であるかの追究よりも、時代即応に教育の主眼をおいてしまふ。時代の変遷を無視せよとはいわない。時代変遷が目まぐるしくなった現今であるから、今こそ時代即応の愚を悟つて、時代を貫ぬくところにある。また、高貴さだけに憧れていた貴族趣味的教育も、ここまでなりふり構わず卑俗化した人間が露呈されたのだから、人間が人間に教育しようとする営みが何であるかの問いかげが、急場の間に合わせてや虚飾虚栄心からではなく、人間の本音として聞えて来てよさそうにも思えるのである。

三、

そのためには、人間が世俗化するも可とする理論を整えねばならぬ。たとえ、山の手人種に比べて下町人種のよさはどこにあるかというのに似ている。山田洋次監督が「寅さん映画」を撮り続けているのは何故か。世俗的に住み慣らす人間の方に、変らぬ長い人間心情を見つけているからであらう。そこには、お人よし、他愛なさ、おめでたさ等々、かならず一方では齷齪を買いながらも、一方では歓迎しているくらしの方の基調となつている。強かな生活感情があるといわねばならない。

それらは決して道徳的勸善懲惡とか刻苦勉強とか教条主義ではない。生活を生活する、いわば世話がかかることの意識を何よりも専行させるのである。だから、愚行や失敗は世の中を生きる未熟さから来る滑稽さとなつても、個人的自滅や破壊に至らせるほど虚弱体質とは思わないし、包容という強かさを備えている。勿論、疎外、転落ということがないではない。しかし、その時はそれは勸当、追放という縁切り見限りであり、御縁につながる限り、見限られぬ限り世間の絆という太い共同連帯感に縊り合わせられて、また縊り合わせるという生きる条理を示すのである。下町に住む人たちは、世間に様の字を加え世間様と呼び、お蔭様をお題目のように唱えたのも尤もなことと思う。

世俗化して生きることの条件に、言い古された義理人情というアンチ・テーゼが課せられることも衆知の通りである。近松門左衛門が、巷に起つた心中事件をニュース・スクープして新浄瑠璃として脚色、大成をおさめた秘訣も、この義理と人情の板挟みの中で死に赴くという設定を試みたためである。つまり、当時の世俗感情を煽つたからであり、これを後世、話浄瑠璃というようになることも、私などは面白いことだと思つている。それは、世俗化して生きるということからいえば、近松戯曲は、むしろ世俗化して生きることの破

綻者ばかりを採択しているのであつて、義理と人情との世渡りのうまさや勿論、その面白さすら手掛けようとはしていない。世渡り上手は憎まれ役か敵役にまわされる。『冥途の飛脚』の丹波屋八右衛門、『おさん茂兵衛、大経師昔暦』の手代助右衛門、『心中天の網鳥』の太兵衛等々が然りである。しかし、いわゆる狂言まわしをしているのは、これらの世故にたけた人物がしており、いわば、恋の主人公たちは、その齒車からはじき飛ばされて行く仕組みを持つているのである。近松の心中作品を、世間に背を向け抵抗者の死のように讚美する人がいるがそれは誤りであろう。心中者たちは世間様に顔向け出来ない詫びとして死であつたことが忘れられている。やはり、恋の勝利者ではない、世間からの脱落者を意味する駈落ち者の滅亡への道行だから、世間は慰藉の涙をかけるのである。駈落ち者に追手を差し向けるのも世間ならば、また死をもつてする世間への詫びに、世俗はいたわりの涙を流すところで、世話物という範疇に納まるのである。まさに「虚実皮膜」も「慰み」も世俗化して生きることへの挑戦ではなくて、世俗に身を委ねる者への鎮魂の譜なればこそ世俗はそれに和したのである。

四、

こう言えば、「長いものには巻かれる」と

か、「渡る世間に鬼はなし」とか、世俗の強靱さもしくはその善意をいう諺に思い当る。しかし、今ここで取り上げていることは、世間あるいは世俗の解釈よりも、世俗が人々を生きる姿勢を教えていることの発見を言おうとしているのである。簡単にいうと世故である。世故にたけることが世俗を生きる生き方であり、そのための諺が用意されていたというべきである。

一体、今日は世俗を生きる生き方を重要視しているであろうか。社会教育という言葉はあつても、とても同質のものとは思えないではないか。

世俗を生きる姿勢が既にちがうように思う。現代人が忘れたのは、まず何よりも己れを低うする姿勢である。具体的には、昔の人々は、世俗に交わるために辞儀を習っている。これは、現代人の意識の中にも、お辞儀をするとは頭を下げることに、根深い伝承のあることを思い返せば、諒解せざるを得ないだろう。

辞儀は文字が示す通り、ことばでする儀礼本来であつたのだろうが、それに頭を下げる行為が伴つていたので、その行為伝承の方が印象的に残留したのである。また辞儀という熟語が和製であるのも興味深い。

別稿で引用したことであるが、会津藩の少年の申し合せ条項に、「年長者にはお辞儀しなければなりません」とあつたことが思い

合わされる。

世俗に立ち交るといふことは、仲間入りの儀礼を要求されるのは、当然の仕来りであったのであろう。仕来りが形式を生み、それが重んじられると礼式である。

世俗に生きるためには通俗の過程を必要とした筈であった。現代われわれが用いている通俗の語感に輕蔑の念ともにあるが、ここにも、近代の教育が江戸三百年來の伝統的な日本人の日常生活の基本教育を如何にひん曲げたかを示す一例ともいえる痕跡がある。俗悪・俗臭・卑俗・低俗・凡俗、これらの言葉はおそらく近代に入つての造語ではなかつたらうか。折りあらば調べてみたいとも思つていることであるが、高貴・高雅・高尚・高潔さを学ぶ前に凡愚を学ぶ必要があつたのである。足が地についているといふことはそのことであつたのである。非凡さは人々を讚美させるかもしれないが、平凡さは人々を安定させていることを忘れてはならない。それがたとへ慣れにすぎないといわれようとも、慣れや慣らすことによつて、人々は暮らしを整えているのである。『変りはないか』を日常挨拶に使う日本人の生き方の基本には哲学があるといえる。事無きを常とし、大事出來の場合を非常とするのは、日常に平和安定した生活の心境と態度のあることを物語つてゐるはずである。行住坐臥を整え、閑雅瞑想に入る

のは何も禪宗の教えからばかりではない。喫茶養生、俳諧連歌、みな日常生活の整え以外のものはない。

特別に、ここで山鹿素行の言を引用することもないのだけれども、いま、世俗に生きる論をなす場合、素行の如き先達のあることは有難いことである。素行は端的に『配所殘筆』に、学問が、「世間とは不合、皆事物別に成候」と憂へている。素行の学問が日用人倫の学であることはよく知られていることであるが、「教の久しや、自ら風俗となりて、人々自ら安んず」（『聖教要録上立教』）と、教育が風俗に働くところに目的を定めたことはもつと見直されなければならない。

そして少くとも、幼稚園・小学校の教育の根幹に、日常実践的人間の生きざまの習練を据えなければならない。素行は、農工商の被政者に寄食しながら為政者たる武士の存在理由を求めて、武士道を確立しなければならなかつた。その著書に『武教小学』がある。

江戸時代の武士層に入門初学教科書として広く普及したという。内容は、その名が示す通り、朱子の『小学』に範をとり、卑近な生活実践を述べているのである。その序に素行はいう。

有宋の晦菴（朱子のこと）、『小学』を作して、人生まれて八歳より十四歳にいたる迄、教うるに、灑掃・應對・進退の節、親を愛し、長を敬し、友を親しむの倫を以てし、

かつ嘉言善行を以て終篇となす。その功偉なる哉、盛んなる哉。

つくづくと考えてみて、幼童の間に、右の事柄が身につけば、まことにその功偉なる哉盛んなる哉ではないか。また、日本の初等学校を「小学校」の名で呼ぶのも、決して、大中小の比較級ではなくて、江戸時代以降の生活教育志向の影響にちがいないのである。そして小学校の掃除当番の如き、長い教育伝承であつたことに気がつく。八歳から十四歳までというのも、小学校を蔽うて余りあるではないか。

更に国語教育との関連で注目し与いするのは、「言語」とせず、「言語應對」と項を設けており、

言語應對は、志の適くところなり。戲言も思いより出ずといふは是也と記すところである。

小学校のカリキュラムは知的になりすぎている。小学生が学びたいのは、知的対象としての「言語」ではなく、心の使い方である。人の子が、人として立ち交わるための心の向け方、配り方を求めている。これが年齢相応に、時処をわきまえた應對ができるのを、世間は期待しているのである。またそれを誰よりも喜び安心するのはその子の親なのである。

（玉川大学教授）